

前回に続いて、今回は、昭和二十八年七月六、七日の柳原白蓮の動向を記す。

前述の村沢武夫が編集し、名水さるくら会が発行した『猿庫と茶の湯』（昭和五十七年発刊）によると、白蓮は七月六日、奥村宗文・原守国らの案内で猿庫の名水を訪ねている。

次は、その時の一首である。
猿庫のいづ（ず）みが
かたるささやきを し
づ（ず）かにきけば胸
にしみ入る
また、前回紹介した塚平義郎の一文によると、この日の午後、白

蓮は、旧竜丘中学校講堂で講演した。

たぶんこの講演を聴いたのであろう。当時時又に住んでいた歌人橋爪丘の人（本名行雄）は、郷土紙「南信時事」

柳原白蓮と飯田下伊那 中

鎌倉貞男

（7月14日発行）に、

「詩歌は生命の叫び」と題した一文を寄せ、その感動や感想を記している。

そこには、出席者はほとんど婦人で、男性は極めて少なかったこと、演題は「現在日本の立場に於ける覚悟」

だったこと、七十歳に近い老婦人がとてもしつかりした意見を持つていて驚いたこと、戦死した子の話をハンカチで目頭をおさえながら話したこと等が述べられている。そして最後に、白蓮は深い悲しみを知る情熱の人だと感じたと書いている。

実は、この講演会開

催に際しては、竜丘村長林省三、公民館長兼教育長木下右治、婦人会長代田きそ等の協力があった。その結果、当日は村内各方面から大勢の出席者が得られ、かなり盛況であったらしい。

講演と揮毫を終えた白蓮は、時又の梅の屋に行き、茶会に臨んだ。しばらく休んでから、

写真を撮影した。写真は、前列右から同伴の高木邦子・柳原白蓮・随員の酒井正夫であり、後列は仲介者の塚平義郎・木下右治・代田きそである。

翌七日の白蓮の動向は、龍江公民館発行の「龍江新聞」第45号（8月1日発行）に詳しい。

それによると、二人の歌人の講演会は、七日午後一時より旧龍江村役場第三会議室で行われた。農繁期にもかかわらず、婦人を中心に百五十名もの聴講者が集まったという。

その夜、二人は林省

三公民館長宅に宿泊した。同家の二階から天龍川の夜景を眺めた白蓮は、遠く近くに乱舞する蛍を見てとても喜んだという。

時に白蓮は六十七歳で、（当時とすれば）老境に入っていた。そのせいか、同新聞には、疲れはみられずとても元気だが、髪は白く、

耳もやや遠く感じられ、美人の誉高かった往年の姿は消えていたと書かれている。

しかし、郷土にのこる来飯時の写真からうかがうと、人品骨柄どことなく、かつて「大正三美人」の一人と謳われた美貌と気品がしのばれる。

（故人敬称略）



竜丘での講演会の後